【ポスター発表】

消滅可能性にある集落住民へのソーシャルワークに基づく支援

―文献研究を通した支援方法の構想－

○　関西福祉科学大学　御前　由美子（07258）

安井　理夫（関西福祉科学大学・04944）小榮住　まゆ子（椙山女学園大学・06307）

西内　章（高知県立大学・03704）

生活支援ツール　ナラティブ・アプローチ　　協働

１．研 究 目 的

総務省の調査（2019）によれば、「いずれ」または「10 年以内」に無居住化に至る可能性がある「消滅可能性都市」が全国で 3197 集落あることが明らかになっている。しかし、これまでの過疎地域への支援は、集落としての存続に焦点をあてた研究が中心であり、住民の暮らしという実体を素通りした支援者の枠組みや価値観にもとづいた議論が多くなされてきた。本研究では、住民がこれまでどおり自然に生活していけるように支援するエンパワメントと、ごくふつうの生活者の感性から発想するノーマリゼーションという 2 つの立場から、消滅の危機にある集落住民に対する支援方法の構築を目的としている。

２．研究の視点および方法

ソーシャルワークのグローバル定義（IFSW 2014 年）では、地域・民族固有の知(indigenous knowledge)という概念が含まれており、これは「世界各地に根ざし、人々が集団レベルで長期間受け継いできた知」のことである。したがって、ソーシャルワークでは、従来の「身体・精神・社会」といった側面に加えて、①スピリチュアル（霊的）な領域、②利用者と協力して作っていく知識という 2 つの方向が含まれなければならない。このことから、消滅可能性にある限界集落に対して、①アセスメントには、宗教への思い、自責の念､死生観などのスピリチュアルな側面を含んだ､限界集落住民のごくありふれた、ふつうの生活感覚に寄り添う支援、②支援者の考えるゴールに向けた支援ではなく、住民の蓄積された知恵や貢献に触れる支援が必要であると考えられた。このため、具体的な方法として、これまでにも実践実績がある①生活支援ツールの活用、②住民への聞き取り方法としてのナラティブ実践研究の意義（特に、利用者の生活世界への理解、ソーシャルワークの支援過程の展開、利用者と支援者の協働、利用者と支援者の相互作用によるストーリーの組立てと意味づけ作業、利用者のストレングスの発見と活用によるエンパワメント実践に着目して）について検討を行った。

３．倫理的配慮

本報告における引用・参考文献等については、著作権保護にもとづき、研究目的以外に使用しないことを誓約するとともに、日本社会福祉学会研究倫理規定を遵守し、先行研究を引用・参照した場合にはその存在を明示する。

４．研 究 結 果

（１）集落住民への生活支援ツールの活用

生活支援ツールで生活情報をビジュアル化することで具体的な生活課題の抽出を通し、高齢者の低迷しがちな士気が高まり、課題解決・自己実現の達成、生きがいある生活が実感できるようになっている。さらに、生活支援ツールを活用したアセスメントへの利用者の参加は、①実践過程展開の主体としての自覚、②利用者が客観的な立場で自らの状況をふりかえる機会、③ソーシャルワーカーへの理解と活用、④セルフ・イメージの立体化、⑤主体的参加の結果としてのコンピテンスの向上を可能にすることが確認されていた。消滅危機にある集落住民には、もうどうしようもないという諦めの気持ちや喪失感、自分の人生が報われないなどの感情がある一方で、少しのきっかけによる意識変化への可能性についても報告がなされていることから、ビジュアル化された生活状況を集落住民が包括統合的、客観的に見ることで自分の生活を実感としてとらえることに加え、少しの変容をも視覚的にとらえられることは、今後の意欲の向上につながるのではないかと考えられた。

（２）集落住民への生活支援ツール活用とナラティブによる対話

生活支援ツールは、生活状況を利用者と支援者で共有すること、そしてその共有過程で生まれる利用者と支援者の対話を通じて利用者の語られた物語の意味づけを理解すること、それがドミナントストーリーであればオルタナティブストーリーへの再構築を模索するといった実践へと展開することができる。また、支援ツールの加点法アセスメントという特性から可視化された結果はストレングスを見出しやすいことから、自己についての語り自体が自己肯定をもたらし、外在化されたストーリーを聴き手である支援者に理解され承認されることは、自分自身の人生を批准されたと認識できることにもつながる。この一連の流れは、ストレングスを見出し活かすことでエンパワーされ、レジリエンスを発揮すること、つまり、どのような状況下でもこれまでの体験を生かした主体的な問題解決過程を可能にし、コンピテンスを高めることにつながるのである。このようなことから、ソーシャルワークの科学性と実存性を統合させる方法の手段として支援ツールの結果を介した無理なく展開されるナラティブによる対話は効果的であると考えられた。

５．考 察

生活支援ツールをナラティブによる対話とともに用いることで、様々なエピソードが生まれると予想される。そこで、行政区としての村落史ではなく、住民の言葉をそのままとらえた集落史を住民と協働して作成することも可能であろう。このような集落史によってスピリチュアルな世界にも迫ることができ、集落消滅への不安や存続への焦りを軽減するとともにエンパワメントに寄与することが可能となり、住民への利用者志向モデルにもとづくソーシャルワークによる支援方法を構築できるのではないかと考えている。

＊御前由美子、安井理夫、小榮住まゆ子「生活支援ツールを介した対話による限界集落住民への支援」関西福祉科学大学紀要 24、2020 年、47-59 頁